

肝付第十六代兼続入道省釣の関係した連歌

橋口 晋作

大隅の豪族肝付氏が居城した高山については、応永十一(一四〇四)

年に凡灯庵朝山師綱が前足利第三代将軍義満の使者として大隅・薩摩に下向した時の記録に、「路次之間も加治木黒川に棧敷打 加治木高山方連哥其外之興^共。被求ける」という記事^(注二)があった。この「加治木高山方連歌」というのは、凡灯庵の指導の下、加治木衆と高山衆とで連歌を巻いたということであろうか。当時、高山は、島津領内では加治木と並んで連歌の上手がいる所と認められていたのに違いない。応永十一年は、肝付氏では第十一代兼元の時代になる。しかし、残念ながら「高山方」の連衆の名前は伝えられていない。

永正十四(一五一七)年、月村斎宗碩が日向から大隅、薩摩に巡歴して来た時、肝付三郎五郎宿所で連歌が巻かれたようである。この時、肝付三郎五郎が連衆の一人となったことはほぼ間違いない。しかし、この時も連衆は記されていないし、作品も残されていない。

永正十四年から三十年程後、肝付第十六代兼続入道省釣には、筆者の知るところ、連歌作品が三つ残されている。省釣の関係した連歌としては、『鹿兒島県史料 旧記雑録』^(注二)に千句連歌の発句だけを記したものが二つ挙げられていた。昨年、この『鹿兒島県史料 旧記雑録』

には収められず、『連歌総目録』^(注三)に概要が挙げられている宮崎県立図書館蔵杉田文庫の百韻連歌を見せてもらったので、ここに改めてこの三つの肝付省釣の関係した連歌を紹介して、多少の考察を加えてみたい。^(注四)

千句之発句

まず、『鹿兒島県史料 旧記雑録』に掲載されている、天文十九(一五五〇)年卯(四)月六日に「たかす」で巻かれた千句連歌の発句^(注五)を次に記す。

もろこしもけふをたつ日か春霞 省釣

鳥の音は織(ら)^(注六)れぬ花のにしき哉 宗文(春信)^(注七)

雨やんてはや若草のみとり哉 宗文

聲のおるかつらか月のほとゝぎす 珠玄

浦なみにあつさもかへる夕(へ)かな 兼辰

萩の葉やすかたともみん秋の風 珠妙

もるかけはかたわれ月の木の間哉 在政

露ならてもみちはそむる夕日哉 忠賢

たちぬるゝ袖かね覺のさ夜時雨 壽信

一とせは雪につもれるなかめかな 宗卑

追加

卯の花はくるゝましらぬ垣ね哉 貞識

この千句連歌は、最後に紹介する「賦何路連歌」が巻かれた二年後に催されている。発句作者の中で、「鳥の音は」の作者は「春信」と訂正されている、忠賢は「新納弾正」、貞識は「石崎主税」と注記されている。忠賢については、新納第十代忠茂の兄弟に同じ名前の人物がいて、同時代であるが、「四郎次郎・左馬頭」としか記されていない。この年、永正八（一五一一）年生まれ（注八）の兼統入道省鈞は三十九歳であった。彼は、六年前の天文十三年に入道していた。兼辰は、肝付第十二代兼忠の兄弟で頼娃を号した兼政の子であろうか。「又九郎・函書助」とある。但し、かなりの年輩ということになる。珠玄は、連歌師高城珠全の子か門弟と考えられている。珠妙も同様の連歌師ではあるまいか。残りの宗文、宗卑、在政、壽信については、全く手がかりを見つげだせない。

「たかす」は、鹿屋市高須であろうか。

発句は、「もろこしも」から「雨やんて」までが春、「聲のおる」と「浦なみに」が夏、「萩の葉や」から「露ならて」までが秋、「たちぬる」と「一とせは」が冬、追加が夏である。従って、この千句連歌の本体の発句は、春秋が三つずつ、夏冬が二つずつという風に四季の発句になつてゐる。鳥津忠夫氏によると、千句の発句は「当季の発句から四季題の発句へ」変遷して行つたことである（注九）。しかし、この千句の場合、後記のことなどから、何か特別な意図で催されたのではないかという気がする。追加の発句は、この連歌が催された季節夏の発句で、平穩に世界を取めたというところであろうか。また、これらの発句に

は賦物が記されていないが、これは、四季題のように四季の発句が求められたことに関係しているのではなからうか。

さて、特別な意図に関わつてであるが、この千句が催される直前の吉日、肝付越前守兼演入道以安が守護貫久から加治木に所領を貰い、また、この当日は踊で北原氏と合戦に及び、十五歳の次男兼逸を失うに至つてゐる。この千句は、これらの事と何らかの關係はないのであろうか。また、発句の作者に息良兼の名前が無いのは、どうしてであろうか。後の「賦何路連歌」に見るように、良兼は、発句の作者として名を連ねてゐるべき技量、年齢に達してゐた筈である。筆者には、これらのどれかに関わつてこの千句は催されたのではないかと思われるのである。

肝付省鈞等詠草

同じく『鹿兒島県史料 旧記雑録』に「肝付省鈞等詠草」として紹介されているものを次に記す。（注一〇）

何路第一

梅（の）花神代もきかぬ色香哉 省鈞

何木第二

あさ夕の空の色とる霞かな 壽信

何船第三

春は月いつくにみるも木（の）間哉 珠玄

第四

朝にはきえて雪ふるみ山哉

忠氏

山何第五

わか草のほかやはいはん野への春

宗文

白何第六

うらなみに心なつけそ春のかわ

兼辰

二字反音第七

青柳は露を花なるすかたかな

長和

御何第八

空にあそふいとかと見えて雨もなし

兼季

朝何第九

風に身をまかせて見はや山櫻

釣雲

何人第十

十かへりを花にならほせ松の風

良兼

この千句連歌には、催された年月日、場所の記載はない。

発句の作者は、省釣・珠玄・壽信・宗文・兼辰が前の「千句之発句」作者と共通している。良兼は、省釣の子、肝付第十七代良兼であろう。母は、日新齋島津忠良の女御南、天文四年の生まれである。釣雲（号であろう）・忠氏・長和・兼季は詳らかにしえない。

省釣が第一の百韻の発句を詠んでいるのは、「千句之発句」と同じ

である。しかし、この千句では最後の百韻の発句を良兼が詠んでいる。従って、この千句は、肝付宗家の文雅を誇示した体裁を取っていると
言つてよからう。

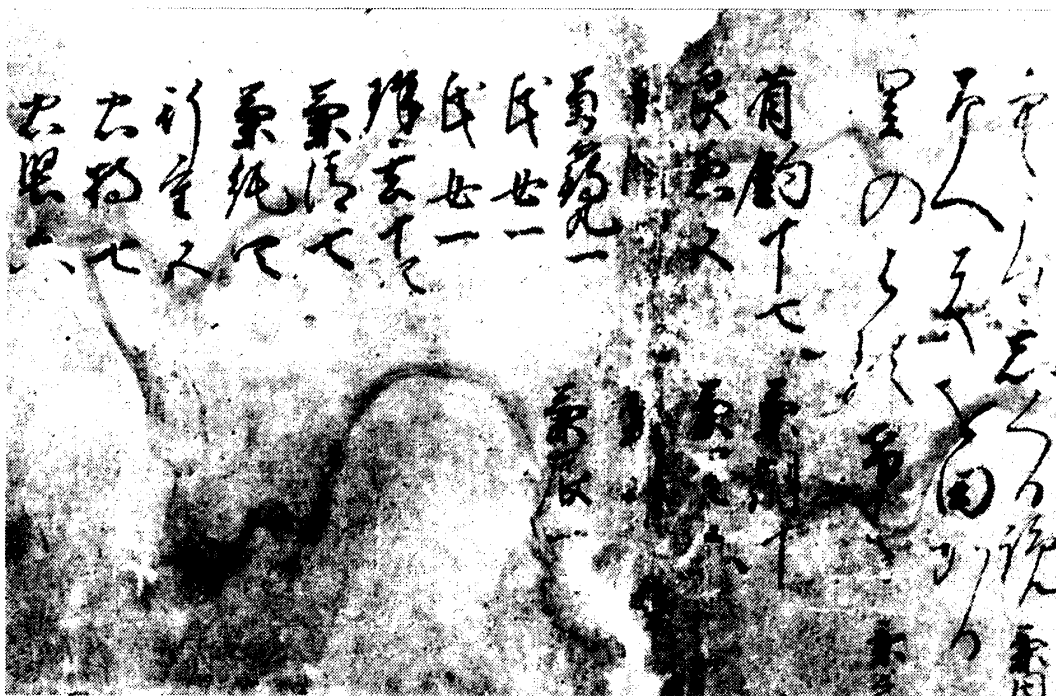
発句は全て春の句である。従って、この千句連歌が催された季節は春だったと見られる。当季の発句という本来的な千句なので、この興行は、肝付宗家の文武両面の勢いを誇示することの他には、特別な目的はなかつたと見られる。

催された年月日の記載はないが、良兼が発句を詠んでいることから、次に紹介する「賦何路連歌」の巻かれた天文十七年二月十四日より後に違いない。また、連衆が五人も前出「千句之発句」の作者と一致するので、「千句之発句」が巻かれた天文十九年前後に催されたものである。

さて、この千句連歌は、前の「千句之発句」に比べると、それぞれの発句の賦物を記している。これは、この千句が当季の発句から成っているからであろう。賦物の形を見ると、上賦、下賦がそれぞれ四つずつとなつている。残り二つの中、第七は、「花」の「二字反音」である。ところが、第四の方には、賦物が記されていない。ここは上賦・下賦でも宜いはずで、最初に記されるべき賦物が無いというのは、原本が虫食いになつていて、分からなかつたということでもあろうか。問題は、賦物も、全体としては正統的である。



(懐紙冒頭)



(句上)

賦何路連歌

この連歌懐紙の存在は、『連歌総目録』に次のように記されている。

1548/2/14 (成立) 天文17年2月14日 (種別) 百韻

〔賦物〕何路 〔発句〕遠近もひとつにかすむ浦は哉 〔発句作者〕省

釣 〔脇句作者〕良兼 〔作者句数〕省釣 17、良兼 5、兼因 10、

菊鶴丸 1、氏女 1、珠玄 14、兼清 7、兼純 4、行重 5、

忠持 7、忠 6、兼朝 10、兼里 6、兼之 10、兼辰 1 ;

原懐紙、句数は句上による 〔句上〕有

(以下略)

しかし、次に紹介するようにこの作者句数(句上)は正確ではないので、ここにこの懐紙の全体を翻刻することにした。

(原文横書き)

天文十七年二月十四日

賦何路連歌

遠近もひとつにかすむ浦は哉

省釣

小舟さしゆく浪のゝとけさ

良兼

鴈かねのかへる夕(へ)をしたひきて

兼周

ほのく月は出る山の端

菊鶴丸

このころや誰(か)里わかぬ秋ならん

氏女

ふきとふきぬるかせそ身にしむ

氏女

衣ともあらぬはかりに旅なれて

珠玄

しのきし道はいく日なる覽

兼清 初表

そことしもしらぬ野はらのやすらひに

兼純

はや暮(れ)けりな雲かへるそら

行重

とはれんと思ふか中やたのむらん

忠持

しのふとすれと色に見えにき

忠堅

なにゝかもしはしは袖をまかへまし

兼朝

たきにははせる夜半のかたらひ

兼里

かすかなる月の真木の戸さしやらて

兼之

きゝやあかさむちかき虫の音

省釣

なく鹿は嶺よりみねのおくなれや

兼清

ゆきかひしけき山のしたみち

珠玄

世や花をたかきいやしき思ふらん

良兼

さくらを人のかさらぬはなし

兼朝

ふりはゆるたもと露けき春雨に

兼辰

田のものなかれ水をとす

忠持

風も今ふきてすゝしき夕ま暮(れ)

初裏

秋をまちける雲のふるまひ

兼之

うす霧のかつく空に立(ち)そめて

兼純

月をまかきのうへに見るころ

忠堅

白妙の菊さく宿のましはりに

兼里

めくらしなからあかぬさかつき

省釣

けふことにかゝりてくらす和哥

珠玄

世にたくひなき身とやならまし

兼朝

玉の緒のたえもはつへく戀(ひ)侘(ひ)て 省釣

よはるてふからこゝろ見えけり

兼之

しのひしかかひはありやは袖の上

行重

にほひもふかきけさの衣く

珠玄

かすむ野の花の下ふしわすれめや

兼清

えならぬ露のむすふわか草

省釣 二表

つくりなす庭のかたはら春浅み

忠持

ふまぬこほりもやくたけ行(く)

良兼

岩つたふみきはの道に駒とめて

珠玄

朽(ち)たるはしのすゑのあやしき

兼之

とふ人も嵐はかりの古寺に

省釣

秋はわするゝけしきともなし

兼里

月かけのもりの夕(へ)をうちなかめ

兼朝

霜にからすのすさましき聲

省釣

ひとり有(る)こゝろもかつはなくさめて 忠堅

まきかへし見る文のつれなさ

兼之

うきおもひすてやらぬこそはかなけれ

行重

御法にうとくなとかむまれし

省釣

神のます國はほとけもちかかりき

珠玄

なをきをねかへ道のひとすち

兼周 二裏

おしまるゝ花のさかりはかへらめや

兼之

木するに明(か)しくらすうくひす

兼朝

谷ふかみ消(え)ぬか上に雪ふりて

省釣

又さえかへる空となりనికి

兼清

草の戸や目さますまゝの風のをと

兼里

軒もる月のかけそかたふく

兼純

うき秋とおもひなからやきりくす

忠持

露の間もなくうたふこゑく

行重

道の邊や木こりのあまたつとひきて

忠堅

いくとすさひに水むすふらん

珠玄

松の陰さしいてかたくあつかりき

省釣

世やすみよしとをくる里人

兼朝

かくす身の心ふかきやをのゝ奥

兼之

よしやゆかりの名をもわすれん

珠玄

よのつねの程こそたのむ戀路なれ

兼清

ことにいてつゝうらみやらまし

省釣

おもふとも思ひの色は見えかたみ

珠玄

山にすみてもあふく君か代

良兼

身におはぬめくみを請(ひ)しすゑなれや 兼朝

かれても草に露やとるかけ 忠堅
 松の葉にのこる時雨や聲ならん 省釣
 けふりもさむしさゝふける庵 兼之
 ありければ玉敷(く)ゆかも夢にして 兼里
 六十(ち)のあまりやるかたもなし 兼清
 かくまでのこゝろほそさも誰しらん 省釣
 待(つ)夜かさなるしのゝめの月 珠玄
 あさかほの露のたくひにきえねかし 兼之
 もみちにかゝるをちの夕霧 兼朝
 山高みいりあひのかねの音はして 珠玄
 岩ゆく水に猿さけふなり 忠持
 柴人やをのかさひしきならふらん 兼之
 袖にふきくる野風はけしき 省釣
 かれやらぬ尾花も冬の色見えて 兼朝
 もとのねさしやこゝろみたるゝ 珠玄
 くろかみのなれしまゝなる面影に 兼里
 などあしひきのやまぬおもひて 省釣
 いやましに露となみたやふかむらん 忠持
 さすらへきたる秋のかなしき 忠堅
 月も見よかくあさましきあさ衣 省釣
 こけのむしろはつゝくともなし 兼之

「三裏

川波の雪かと花のちりしきて 珠玄
 水上とをくうちかすむころ 兼清
 驚ねふるかたは朝日のうらゝかに 忠持
 まかひし霜のきゆる真砂地 兼朝
 いたゝきの年くかはる色はうし 省釣
 たくへはおもひ□□□もの□□ 珠(玄)
 いくそたひ□□しひけらしわかこゝろ 兼純
 くもりかちなる月のよなく 良兼
 秋やまたふけぬ空よりしくる覽 兼周
 なへてを田かる里のはるけさ 兼之

省釣 十七 兼朝 十
 良兼 五 兼里 六
 (兼周 三) (兼之 十二)
 菊鶴丸 一 兼辰 一
 氏女 一
 氏女 一
 珠玄 十四
 兼清 七
 兼純 四
 行重 五

「名残表

忠持 七

忠堅 六

「名残裏

この百韻連歌が巻かれた時、省釣は三十七歳、良兼は十三歳である。

氏女二人が連なっていることから、極めて私的な座であつたと思われる。良兼の年齢から想像すると、成人した良兼が父省釣を招いて、その挨拶をするといった儀式的な催しだったのではなからうか。もしそうだとすれば、氏女の一人は良兼の母、阿南なのかも知れない。また、もう一人は、後記の理由から省釣の母であろうか。兼辰と珠玄は、前記千句連歌のいずれにも参加していた。執筆は菊鶴丸であろうか。四句目に句を詠んでいる。尤も、執筆らしく一巡の後、百韻の最後に句を詠んでいるのは兼之であるが、兼純は越後守兼純であろうか。越後守兼純は、省釣の祖父兼久の兄弟越後守兼頭の子である。この兼純の兄弟には、九郎将監兼好の養子となつた藏人頭兼朝もいる。連衆の兼純と兼朝は、この兄弟ではないかと思われる。兼清は、一族の加賀守・民部大輔を始め、数人の候補はいるが、いずれとも決めがたい。また、兼里については、前出兼辰の兄弟の次郎三郎兼郷が目につくが、何とも言えない。兼の字が名前の最初に付いている七人の残り兼周・兼之については、全く手がかりがない。また、行重、忠持、忠堅の三人も詳らかにしえない。

連歌が巻かれた場所は明示されていないが、発句が「浦は」を詠んでいるので、「千句之発句」が催された高須のような海に近い場所で催

されたのであろう。

連歌は、省釣の発句から兼之の十四句まで、兼清と兼辰を除いて全員が一句ずつ詠んでいる。兼清は続けられなかつたということであろうか。省釣が二巡目の句を詠み、兼清がそれに続けてからは、順不動に競つて句を詠み出したようだ。客人の省釣が最も多く句を詠み、連歌師の珠玄がこれに次ぎ、末席（か）の兼之が三番目の句数となつている。このように客人が最も多くの句を詠んでいるのは、余り例がないようである（永禄元（一五五八）年九月二十三日に巻かれた和漢で、発句と脇を詠んだ貴久・九高の二人が並んで最も多く句を詠んでいるという例はある）。この百韻の場合は、素直に省釣の喜びと誇りとを見ることができよう。勿論、省釣の連歌の力量は自他共に許すところであつたに違いない。

纏めに代えて

本稿で紹介し、考察した肝付省釣關係の連歌資料は、「賦何路連歌」が最初で、その後、「千句之発句」、「肝付省釣等詠草」が催されたと考えられる。「千句之発句」と「肝付省釣等詠草」はそれほど遠くない時期に巻かれたものと考えた。

「賦何路連歌」が巻かれた天文十七年は、島津貴久が島津第十五代の守護に推された三年後である。その守護の姉を妻に持ち、その妻との間に儲けた子良兼が成人し、その報告の儀式を兼ねたような座だつた

のではないかと考えてみた。氏女が二人も連なっていて、きわめて家族的な座に見えることからである。また、二年後の「千句之発句」は、四季の発句から成っていて、何か訳あつて催されたもののように見える。一方、「肝付省釣等詠草」は、本来的な当季の発句の千句であつた。このように肝付省釣の関係した連歌は、この地の連歌の多様さ、多様な役割を見せ、感じさせるものになつていた。

さて、これらの作品は、管見では、肝付宗家の文雅を伝える最初の資料である。冒頭に記したように、肝付省釣の少年時代、宗碩を迎えて連歌の座がもたれたのは、肝付三郎五郎の宿所であつた。三郎五郎家は、省釣の曾祖父兼連の兄弟兼光に始まる家である。この時期、肝付宗家の連歌活動はどうであつたのか。省釣の母は、伯父飫肥城主島津豊後守忠朝の養女であつた。養父の忠朝の父忠廉は、上洛して宗祇に『古今和歌集』・『伊勢物語』の奥旨を伝授されたと伝えられている。忠朝も、「父譲りで文雅の士であつたらしい」^(注二)。実際、宗碩が巡歴した時、忠朝は、櫛間城で千句連歌を催している。また、忠朝の兄弟兵庫丞忠秋の亭でも、宗碩を迎えて連歌が巻かれている。省釣の母は、このような豊州家一族の娘であつた。省釣は、この母の影響で文雅の士として成長したのであろう。肝付宗家の連歌資料は、このような省釣の喜びの絶頂期から始まつているのである。この最初の連歌の座に「氏女」二人が連なっているのも、きわめて印象深い。

一方、この時期、省釣と同座している珠玄を介して、樺山安芸守善

久が半養斎宗義と文通している。弘治二(一五五六)年からは、珠玄は珠全と共に守護貴久の連歌の座に連なっている。それに伴つて、肝付宗家の連歌資料に代わつて、守護貴久方の連歌資料が現れて来る。資料の残つた運もあろうが、このような様相を見ると、連歌師珠玄の果たした文化的役割もまた大きいのである。肝付省釣の連歌も、この珠玄が連なることによつて書き留められ、現代に伝えられたとも言えるのではなからうか。

(注一) 鹿児島県史料集VII(昭和四二年三月)の「山田聖栄自記」に依つた。

なお、「旧記雑録 前編二」所収の文書は、「加治木高山某請待上使 催連歌之一興」という表現になつている。

(注二) 「旧記雑録拾遺 家わけ二」(平成三年一月)。

(注三) 連歌総目録編纂会編(平成九年四月)。

(注四) 考察に当たつては、山田孝雄『連歌概説』(昭和一二年四月)、『島

津忠夫著作集 第二巻 連歌』(平成一五年六月)、川添昭二『中

世九州の政治・文化史』(平成一五年七月)などを参照した。

(注五) 史料掲載順位七六。

(注六) 作品中の()は、送りがなを補つたところである。

(注七) 作者名に三カ所の訂正・注記が入っているが、訂正のみ()を付けて記した(注記については本文参照)。

(注八) 注四の川添氏の著書によつた。

(注九) 注四の島津氏の著書から。

(注一〇) 史料掲載順位一四二。

(注一一) この句と次の句は、途中料紙が擦り切れて、読めなくなっているところがある。

(注一二) 句上のこの行も、擦り切れて読めなくなっているが、連歌本文を参照して、() のように推定した。

(注一三) 注四の川添氏の著書から。

貴重な資料の閲覧・紹介をお許しいただいた宮崎県立図書館に厚くお礼申しあげる。特に、資料課長渡邊順一氏にはいろいろ便宜をはかっていただいた。記してお礼申し上げる次第である。